『健康の庭』
——本草挿絵の諸問題について

池田真弓

はじめに

一四五五年頃、ヨハン・グーテンベルクは金属活字を用いた活版印刷術による最初の冊子本として、四十二行聖書、通称『グーテンベルク聖書』をマインツの地にて印刷した[1]。ちょうどその三十年後の一四八五年、彼の弟子であったペーター・シェーファーが同地で営んでいた印刷所から、木版挿絵入りの本草が出版された。『健康の庭』(*Der Gart der Gesundheit*)と名付けられた本書は[2]、活版印刷術を用いた挿絵入り本草としてはヨーロッパ史上三作目となるが、その最たる特徴として、三八一枚にも上る木版挿絵が入れられていることが挙げられる[3]。本書の挿絵のほとんどは、バジルやイチゴなどの植物、あるいはビーバーや象といった動物など、多種多様の薬草や薬物を描いたものである。

『健康の庭』の挿絵についてはこれまで、その一部が極めて写実的であるとの評価がなされてきた[4]。実は興味深いことに、本書の序文には挿絵の写実性に対する一方ならぬ関心が示されているのだが、この序文についてはこれまでほとんど注目されることはなかった。そこで本稿では、『健康の庭』の木版挿絵を、その序文の内容に照らして分析し、挿絵の写実とモデル、下絵制作に関与した画家、そして挿絵の色彩といった諸問題を論じ、最後に本書の出版意図を考察する。

一　『健康の庭』の概要

本書最終ページ(fol. 359v)に赤インクで印刷された奥付に

よると、『健康の庭』は一四八五年三月二十八日にマインツにて出版された。印刷業者の名前は記されていないものの、同地で印刷所を運営していたペーター・シェーファーの標章が奥付に印刷されている点、本書各章の見出しに用いられている活字が彼の印刷所のものである点から、同所の出版であることが分かる[5]。シェーファーは自身の出版物のデザインや制作過程に積極的に関与する場合が多いが、本書に関しては後述する通り、別の企画者（出版者）が存在するため、今回彼は、あくまでも印刷を請け負った業者という立場での関与であったと考えられる[6]。

本書はチャンセリー・フォリオの紙に印刷されており、筆者が調査したコピー中最大のものは290x205mmである[7]。全三六〇葉の本書は重くかさばり、容易に扱えるという類の本ではない。内容は五部構成で、各章見出しの薬草・薬物名は、ラテン語名とドイツ語名が併記されているものの、本文はドイツ語で書かれている[8]。中世の本草はラテン語が一般的であり、本書以前に出版された挿絵入り本草二作品ともラテン語であったことからすると、これは特筆すべき点といえよう[9]。

挿絵には三七八の木版が用意され、うち三枚が二度刷られているため、全部で三八一の挿絵が入れられている。そのほとんどが薬草か薬物の挿絵で、本書の扉絵（fol. 1v）と、第四部の冒頭を飾る扉絵（fol. 341r）の計二枚のみが、その分類から外れる（図1）。これらの扉絵は本書で最も質の高い挿絵群に属しており、このプロジェクトの主要画家が下絵を提供したと考えられる。その他の木版は全て、本書の核となる第二部の挿絵に用いられている。この部では、各章につき一つの薬草もしくは薬物が取り上げられ、その効能などが記されている。全四三五章のうち三七九の章に挿絵が施されている。

図1　『健康の庭』冒頭扉絵（fol. 1v）

二　序文について

本書冒頭を飾る扉絵に続き、二ページ半にわたる序文が始まる（fols. 2r–3r）。本書の出版を企画した匿名の人物が執筆した

この序文には、出版意図や製作プロセスが詳しく記されている[10]。そこで述べられた出版意図を手短にまとめると、この著者は、神が無力な人間のために創造した種々の薬草の効能を「正しい色と形で」(„mit yren rechten farben und gestalt[45])あらわした本を編纂することこそが、この世の善に貢献する業である、との考えに至り、それを実現すべく有能な医師を雇った、とのことである。この序文では、「正しい色と形」に相当する表現が計四回登場する。常套句的に使われている感は否めないが、一方で薬草の見た目を正しく記録したいという願望もあったことは、次のような描写から明らかになる。

> …Und do ich uff entwerffunge und kunterfeyung der kreuter gangen byn in mitteler arbeyt · vermerckt ich · das viel edeler kreuter syn die in dissen teutschen landen nit wachsen Darumb ich die selben in irer rechten farbe und gestalt anders entwerffen nicht mocht dan von hören sagen · Deßhalben ich solichs angefangen werck unfolkomen und in der fedder hangen ließ so lange biß ich zü erwerben gnade und ablaß mich fertiget zü ziehen zü dem heiligen grabe · auch zü dem berg synay […] Nam ich mit mir einen maler von vernunfft und hant subtiel und behende […] Ich mit fliß mich erfaren hab der kreuter da selbest und die in iren rechten farben und gestalt laißen kunterfeyen und entwerffen… (fol. 2v)

> (……そして私がこの仕事［本書の編纂］を進める中で、薬草を描写する段になると、多くの貴重な薬草はドイツの地には生えていないことに気づいた。そのため、伝聞による以外それらを正しい色と形で描写することができなかった。それ故私は、［教会からの］恩寵と贖宥を賜り、聖墳墓とシナイ山を訪れる機会を得るまで、進め始めたこの仕事を完成することなくペンを置いた。［中略］私は、理性と巧みで繊細な手を持つ画家を［巡礼に］同行させた。［中略］私は［旅先で］薬草を熱心に探し、［画家に］正しい色と形で描写させた。……)

序文ではさらに、クロアチア、アルバニア、ロードス、キプロス、エルサレム、アレキサンドリア等々、巡礼の旅路で訪れた地名が列挙されている。

この序文をしたためた人物は、下級貴族の出で当時マインツ大聖堂参事会員だったベルンハルト・フォン・ブライデンバッハBernhard von Breydenbach、本文の編纂を行ったのは、ヨハン・ヴォネッケ・フォン・カウプJohann Wonnecke von Kaub、そして巡礼に同行し、薬草の記録を行ったとされる画家は、ユトレヒト出身のエルハルト・ロイヴィッヒErhard Reuwichであるということが、これまでの研究で明らかになっている[11]。ブライデンバッハは、一四八三年四月から翌年

初め頃までエルサレムやシナイ山への巡礼に出たこと、その際、画家のロイヴィッヒを同行させたことが記録に残っているほか、『健康の庭』出版の翌年には、自身の巡礼記『聖地巡礼』(*Peregrinatio in terram sanctam*)を出版し、ロイヴィッヒに挿絵を描かせている(図2)[12]。この巡礼記の扉絵と、先述した『健康の庭』冒頭と第四部それぞれの扉絵は、例えば顔の形、衣服の襞やハッチングの描き方、画面を縁取るアーチ状の枠に用いられている植物モチーフなどに共通点が見られ、同一人物、つまりロイヴィッヒが下絵を提供したとするのが妥当である(図1、2)。

図2 『聖地巡礼』冒頭扉絵(fol. 1v)、ミュンヘン、バイエルン州立図書館所蔵、2 Inc.c.a. 1725

『健康の庭』の序文を字義通り受け取るならば、本書の挿絵の大半は実物の薬草を観察して描き、彩色したものだということになる。さらに、主要画家であったはずのロイヴィッヒは、巡礼先であった地中海地域に分布する薬草の挿絵を担当したはずである。しかしながら実際の挿絵を分析すると、この序文とは異なる実情が明らかとなる。わけても注目すべきは、挿絵を描くにあたってのモデルの存在である。そこで次に、本書挿絵のモデルの問題を取り上げる。

三 挿絵のモデルの問題

上述の通り『健康の庭』はこれまで一部の挿絵の写実性が注目を集めてきたが、実はそれらの挿絵の対極にあるような、極めて図式的、概略的に描かれた植物描写も少なからず含まれている。それらの多くについては何らかのモデルを基に描いたことが推測できるが、まず考慮すべきは中世の本草写本の挿絵伝統である。なかでも本書は、『単味薬について』(*De simplici medicinae*または*Circa instans*)の挿絵伝統の影響が従来より指摘されてきた[13]。十二世紀前半にサレルノ出身のマッタエウス・プラテアリウス(Matthaeus Platearius)が執筆したとされる『単味薬について』は、本来挿絵がなかったと考えられているが[14]、一三〇〇年頃に制作され、『単味薬について』のテキストを下地にしている写本本草『薬草論』(*Tractatus de*

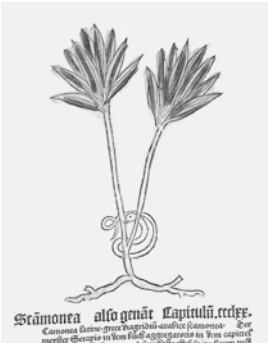

図5 『健康の庭』第370章《スカモニア》

図4 バーゼル写本《スカモニア》(diagridium)(fol. 10v)

図3 ロンドン写本《スカモニア》(diagridium)(fol. 32r)

herbis; 大英図書館所蔵MS Egerton 747; 以下「ロンドン写本」)には挿絵が描かれている[15]。このロンドン写本の挿絵の大半は実際に植物を観察して描かれたようで[16]、十四世紀以降広く流布する『単味薬ついて』の挿絵伝統の源流の一つとすることができよう。このロンドン写本の挿絵伝統がイタリアよりもフランスで受け継がれていることから、ミンタ・コリンズは、当写本が早い時期にフランスにわたったと推測している[17]。そこで本文と共に挿絵も繰り返しコピーされ、図式的、概略的なデザインに落とし込まれていったようである。

『健康の庭』のうち図式的な挿絵を『単味薬について』系統の挿絵と比較してみると、その多くがこの伝統に則っていることが明らかとなる[18]。例えば『健康の庭』第三七〇章「スカモニア」(*Scammonea*)は、ロンドン写本の挿絵が流布する過程で概略化されていく様子が手に取るように分かる。この例では、薬草の形状そのものだけでなく茎の根元に絡み付く蛇も一緒にコピーされたようである(図3、4、5)[19]。さらに第五一章「エブリコ」(*Agaricus*)では、挿絵のコピーの過程で興味深い誤りが生じている。エブリコは針葉樹に寄生する茸の一種だが、ロンドン写本では、一つの挿絵で「モミの木」(*Arbor abiete*)と、その根元に寄生する塊状の「エブリコ」(*Agaricus*)の二種の薬草を描写している(図6)。それに対しバーゼル写本では「モミの木」の項目がなくなり、「エブリコ」の章で、針葉樹と判別し得ないほどに変容した木の根元にエブリコが小さく描かれてい

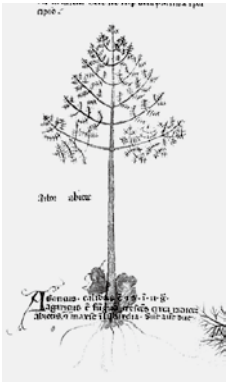

図6　ロンドン写本《モミの木》《エブリコ》(fol. 4v)

図7　バーゼル写本《エブリコ》(fol. 1v)

図8　『健康の庭』第51章《エブリコ》

る(図7)。そして『健康の庭』では、やはり「モミの木」の章がないのみならず、「エブリコ」の章では木が描かれるのみで、肝心のエブリコが抜け落ちている(図8)。『健康の庭』の画家が手本を参照した際にエブリコを描き忘れたか、使用していた手本で既にエブリコが描かれていなかったと推察される。

いずれにせよ明らかなのは、『健康の庭』の挿絵制作の際に『単味薬について』系統の挿絵入り写本が手本として用いられたという点である。そしてその写本を用意したのは、おそらく本書の企画者であるブライデンバッハか、編纂者で医師のヴォネッケであったに違いない。

実は『単味薬について』系統の写本とは別に、ブライデンバッハが画家たちに渡したであろう手本用の写本の存在が、一九七七年のヴォルフ＝ディーター・ミュラー＝ヤンケの論考によって明らかになった[20]。主に医学関係のテキストを含む分冊をまとめた、いわゆる*Sammelhandschrift*である当写本(以下「ベルレブルク写本」)は、実はブライデンバッハが所有していたようで、複数箇所に本人による、もしくは本人に関連する書き込みがある[21]。例えばfol. 63rには、以下のような記述が残されている：“ich Bernhardt von Breydenbach Thumhere zu mayntz versucht Anno m cccc lxxv°”(「私ベルンハルト・フォン・ブライデンバッハ、マインツ大聖堂参事会員が試す一四七五年」)[22]。ミュラー＝ヤンケの調査とその後の研究により、この写本の薬草挿絵のうち少なくとも十七枚が『健康の

庭』で比較的忠実に再現されていることが判明している（図9、10）[23]。

ここで留意すべきは、ベルレブルク写本を手本にした挿絵は本来の植物を彷彿とさせる姿で描かれている、つまり、比較的「写実的」と呼べる描写である、ということである[24]。一見実物を写生したかのように見えるこれらの挿絵も実際は手本を使用して描かれているというこの事実は、本草挿絵の写実性を議論する際の難しさを端的に示していると言えよう。

比較的実物に忠実であるとされている挿絵のうち、従来の研究では指摘されてこなかったものの、やはり手本が想定されるものがある。その手本とは、十五世紀半ばからライン地方で流通し「銅版トランプ」または「カルタ札」として知られる銅版画群に代表されるような、写本装飾画家の図柄集である[25]。例えば『健康の庭』第一六二章「オダマキ」（*Egilops*）や第三三七章「バラ」（*Rosa*）は、同時代、同地域の写本装飾に頻繁に登場するモチーフでもあり、銅版画トランプでも何種類もの図柄が存在する（図11、12、13、14）。『健康の庭』のオダマキやバラも、そのような図柄集の影響を感じさせる。

さらに、「銅版トランプ」そのものを参考にした可能性が指摘できるのが、第二九二章「鹿の心臓の骨」（*Os de corde cervi*）の挿絵に用いられている牡鹿の絵である（図15、16）。《鹿の二》と呼ばれるカードに描かれている牡鹿と、『健康の庭』の牡鹿を左右反転した状態で比較してみると、体のライン、脚の角度、蹄の形、角の伸びる方向や長さなどが近似している。大きさは『健康の庭』の牡鹿の方が一回り大きいが（それぞれ最大約十四センチメートル高と約十センチメートル高）、銅版

図9　『健康の庭』第349章《イヌホオズキ》

図10　ベルレブルク写本《イヌホオズキ》（fol. 332r）

トランプそのものを参考にして描いた可能性は高い[26]。

一方、手本が特定できないもののその存在が示唆されるような挿絵の例として、第一七二章「象牙」（*Ebur*）に描かれている象の絵が挙げられる。中世より北方では動物誌などで象が描か

図12　銅版トランプ《花の一》、ウィーン、アルベルティーナ版画素描館、DG1926/651

図11　『健康の庭』第162章《オダマキ》

図14　銅版トランプ《花の三》、ウィーン、アルベルティーナ版画素描館、DG1926/653

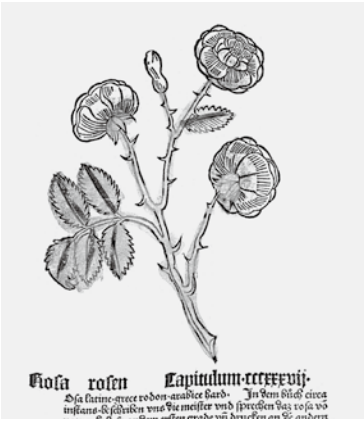

図13　『健康の庭』第337章《バラ》

図16　銅版トランプ《鹿の二》、パリ、フランス国立図書館、RESERVE BOITE FOL-KH-25 (1-2)

図15　『健康の庭』第292章《鹿の心臓の骨》（左右反転）

れているが、大抵は鼻が長いという特徴はかろうじて表現できている程度の、実物からはかけ離れた描写である。それに対して『健康の庭』の象は比較的実物に忠実に描かれている。当時マインツで本物の象を見ることができた事実は知られていないし、この挿絵を担当した画家は明らかにロイヴィッヒではないため、エルサレムやシナイ山への巡礼の際に実物の象を見たということもないはずである。従って、この画家は比較的良質な手本を用いてこの挿絵を描いたと言えそうである。

このように『健康の庭』の挿絵を詳細に検討すると、序文で繰り返されていた写実へのこだわりとは裏腹に、実際は少なくない数の挿絵が何らかの手本に基づいて描かれていたということが明らかとなる。しかしその一方で、本書には手本ではなく実物の植物を参考に描いたと思われる挿絵も少なからず含まれているのである[27]。そこで次節では、それらの挿絵、とりわけ、画家エルハルト・ロイヴィッヒの関与について検討する。

四　写実的な挿絵とロイヴィッヒの関与

『健康の庭』の挿絵のうち画家にとっても馴染み深かったであろう動植物の中には、実物を見知って描いているかのようなものも見られる。例えば、第八四章「カミツレ」(*Camomilla*)、第一九〇章「イチゴ」(*Frage*)、第三六三章「スペルト麦」(*Spelta*) などがそれに当たるであろう（図17）。もちろん、こ

れら全てが実物を直接描いたもの、つまり写生を基にしていると断定することはできない。しかしながら、マインツの辺りで見ることができたであろう植物のうち写実性が認められるものに関しては、画家たちは少なくとも実物の姿を知っており、その知識を活かして描いた可能性は十分にある。

いわゆる「写実的」と呼べる挿絵の中でも、絵としての質の高さが際立っている挿絵群がある。これらの挿絵は、的確で繊細なハッチング、ディテールの描き込み、説得力のある形状表現などの特徴が見られ、同一の人物が下絵を担当したと思われる。例えば植物では、第一〇三章「玉ねぎ」(*Cepe*)、第三〇三章「ポロネギ」(*Porrum*)、第三六四章「ほうれん草」(*Spinachia*)など、また動物では、第二四八章「ウサギ」(*Lepus*)と第四二六章「キツネ」(*Vulpis*)がこの画家に帰すると考えられる(図18、19)。これらの挿絵の様式は、上述した本書扉絵と第四部扉絵、そして『聖地巡礼』冒頭の扉絵の様式と一致している、

図17 『健康の庭』第84章《カミツレ》

図18 『健康の庭』第103章《玉ねぎ》、マインツ、グーテンベルク博物館所蔵、GM Ink 126

図19 『健康の庭』第426章《キツネ》

つまり、ブライデンバッハが巡礼に連れて行ったとされるエルハルト・ロイヴィッヒの手になるものと筆者は考える（図1、2）。これまでの研究では、ロイヴィッヒが『健康の庭』で手掛けた挿絵は六五枚ほどあるとの見解がある一方で、本書の挿絵に同画家は一切関与していないとの論も存在している[28]。一方筆者は、ほぼ確実にロイヴィッヒ作としうる挿絵は二枚の扉絵を含めても二十枚に満たないとの結論に達した。もちろん、ロイヴィッヒの質の高い下絵が版木に正確に再現できていないために彼の手と認められなかった挿絵もあるかもしれないが、この画家による複雑で繊細な下絵は基本的には高い技量を持つ彫り師が担当したはずだとすれば、ロイヴィッヒ作品がこれ以上大幅に増加することはないといえる。

ここで改めて序文の内容を確認したい。それによれば、ブライデンバッハはドイツ国内で目にすることのできない植物を描かせるために、画家、つまりロイヴィッヒをエルサレムとシナイ山への巡礼へと同行させ、行く先々で植物を描かせた、とある。しかしながら筆者がロイヴィッヒの手に帰した挿絵のほぼ全てがドイツ国内で目にする動植物である。それに対して、彼の手によるいわゆる「異国」の植物と呼べるものは、第三六六章「フレンチ・ラヴェンダー」（*Sticados arabicum*）と第三七六章「甘松」（*Spica nardi*）のみである（図20、23）。フレンチ・ラヴェンダー（*Lavandula stoechas* L.）は地中海性の温暖で乾燥した地域に分布し、巡礼先でも探し求めれば見ることはできたと思われる（図21）[29]。ロイヴィッヒの描いたフレンチ・ラヴェンダーは自然で活き活きとした姿で描かれており、花穂の鱗状の姿や、細く肉厚な葉などの特徴を掴んでいる。し

図20　『健康の庭』第366章《フレンチ・ラヴェンダー》、ロンドン、大英図書館所蔵、IB.242

図21　フレンチ・ラヴェンダー

かしこの種の最大の特徴である、花びらのような苞が描かれていない。また、花穂の大きさが茎の長さに対して明らかに大きすぎる点も看過し難い違いである。ロイヴィッヒが実際にこの植物の生えている様子を観察していれば、このような重要な特徴を見逃すはずはない。となると、なんらかの見本を用いて描いた可能性もあるが、『単味薬について』系統写本のフレンチ・ラヴェンダーと比較してみると、両者には特段の類似性は認められない（図22）。あるいは茎が短く切られ、苞も失われた状態の乾燥フレンチ・ラヴェンダーを見本にして描いたのかもしれない。

一方甘松（*Nardostachys jatamansii* DC.）は、チベットやインドなどに分布しており、巡礼先の地域でも「エキゾチック」な部類に属する薬草である（図23）[30]。ロイヴィッヒの挿絵は植物としては違和感なく描かれているが、実際の甘松とは似ても似つかない姿をしている（図24）。空想の植物を描いたのか、あるいは全く別の植物を描いたのか、現段階では不明である。

以上の通りロイヴィッヒ作と考えられる薬草の挿絵を分析する限り、序文で謳われているように、彼が巡礼の際にドイツ国外の薬草を記録し本書の挿絵に反映させたという事実は確認することができない。しかしながら彼が巡礼に同行して得た植物の知識は、意外な挿絵、即ち本書冒頭の扉絵で活かされているようである（図1）。この扉絵には十三人の医学者が描かれているが、注目すべきは彼らの背景に描かれた二種類の木である。それぞれの特徴から、左は柑橘系の樹木でおそらくはダイダイ、そして右は、特徴的な実のなり方からナツメヤシと判別しうる（図1a、1b）。どちらも当時のドイツでは見られないはずの

図22　ロンドン写本《フレンチ・ラヴェンダー》（fol. 90v）

図23　『健康の庭』第376章《甘松》

図24　甘松

図1a　ダイダイ

図1b　ナツメヤシ

植物であるが、双方とも、簡明でありながらそれぞれの種の特徴を絶妙に捉えており、容易にそれと分かる描写である。実はダイダイもナツメヤシも聖地の植生の一部を成していたことが、十三世紀に残された記録から分かる。十字軍に積極的に関与し、自らもパレスチナの地に赴いたフランス出身の司教ジャック・ド・ヴィトリー（一二四〇年歿）は、自身が著した『エルサレムの歴史』で、聖地では見られるがドイツを含むその他のヨーロッパでは見ることのできない樹木を列挙しているが、そこにダイダイとナツメヤシを含めているのである[31]。ナツメヤシは『健康の庭』第二部第一五一章に収録されているが、ロイヴィッヒ以外の画家による概略的な挿絵となっている。残念ながらロイヴィッヒが聖地への旅で植物を観察した経験は、『健康の庭』の薬草挿絵では反映されることがなかったようである。

五　挿絵の色彩について

ここまで挿絵のモデルと写実性の問題について見てきたが、序文では薬草の形のみならず色の正しさについても述べられている。当時の印刷本における木版挿絵の彩色については、主に三つのパターンが考えられる。一つ目は彩色を施さずに販売する場合、二つ目は出版者のもとで彩色を行ってから販売する場合、三つ目は書籍を一括購入した小売業者がまとめて彩色を行ってから個人に販売する場合である。ただし彩色に関する記録が残っているケースは稀であるため、多くの場合、どのような状況で彩色が行われたのかについては現存作品を観察して推測するほかない。『健康の庭』の場合も例外ではなく、彩色に関しては、筆者が行った七部のコピーの色彩の比較調査に基づく考察となる[32]。

『健康の庭』の場合、序文で述べられているような色の正しさを担保するには販売前に出版元で彩色を行うべきである。さらに挿絵の色彩も統一するのであれば、色見本を参照して彩色する必要がある。事実、本書の前年に同じくペーター・シェーファーによって印刷された『マインツ本草』の彩色版では、色見本を用いてかなり厳密に色彩を統一していた形跡が見られる[33]。一方、筆者調査による『健康の庭』の彩色版の挿絵は、基本的にはそれぞれの植物にふさわしい色で塗られているが、各コピーで色の塗り方に異なる特徴を示すことが確認され

た。例えば、茎に用いられる色がコピーによって緑色や黄緑色、黄土色と異なっていたり、同じ花についてもコピーによって色が青、臙脂、白であったりと、異なるコピー間での統一が見られない。使用される色の数や種類も各コピーによって差が見られる。また、一人の彩色師が一冊全てを担当したらしく、コピーごとに色の塗り方に個性が見られる。例えばミュンヘン本では、葉や茎に暗灰色の絵具で葉脈のような線がぞんざいに描かれる傾向がある（図11、17ほか）。また筆者が調査した中では、マインツ本の彩色が最も丁寧で質の高いものであった（図18）。

このように『健康の庭』の挿絵の彩色は、使用色、質ともに厳密にコントロールされていた訳ではなく、それぞれの担当彩色師の裁量に任せられていたようである。また中には、出版元ではなく小売業者が彩色させたケースもあると考えられる。いずれにせよ色彩に関しても、序文の内容とは裏腹に、必ずしも「正しい色」であった訳ではないと言えよう。

結論に代えて――『健康の庭』出版の狙い

本稿ではここまで、『健康の庭』の挿絵をその序文の内容と照らしながら分析してきたが、そもそもなぜ、ブライデンバッハは序文で繰り返し挿絵の見た目の正しさに言及したのだろうか。そして何より、彼はなぜ本草の出版を企画したのだろうか。最後にこれらの疑問点を踏まえ、本書の出版意図と挿絵の役割を検討していきたい。

まず、ブライデンバッハが本草の出版を思い立った背景を考えたい。上述の通り序文には本書出版の目的として、様々な薬草の効能を正しい色と形であらわした本を編纂するということが挙げられている。いかにもレトリカルな内容ではあるが、実はブライデンバッハ自身、当時健康に不安を覚えていたらしいことが、先述したベルレブルク写本の書き込みなどから判明している[34]。例えば彼は、呼吸器系や皮膚の疾患を始め複数の健康問題を抱えていたようだ。彼自身の健康に対する不安が本書出版の動機の一つとなったことは想像に難くない。

しかしそれではなぜ、序文で挿絵の質の高さを強調し、また質にばらつきがあるとはいえ、これまでの本草の例を遥かに超えるほどの数の挿絵を製作させたのだろうか。ここで考慮しなければならないのは、中世の写本本草では挿絵の写実性は必ずしも重視されておらず、そもそも挿絵がないものも少なくなかったという点である。その理由の一つには、本草の主たる利用者であった医師や薬剤師たちは薬草を見分けるための知識を写本の絵からではなく実物から学んだということが挙げられる[35]。また当時の薬局では海外から輸入したものも含め、加工された状態の薬草を購入できたため、本草の挿絵を参照して薬草を特定する必要性は実はそれほどはなかった[36]。とするならば、ブライデンバッハが挿絵の見た目の正しさを強調したのは医療のプロというよりはむしろ、挿絵そのものも楽しみたい、そして

普段薬草を自身で扱うことの少ないアマチュアを主な読者として想定していたからだとは言えないであろうか。実際、中世の写本本草でも豪華な部類に入るものや挿絵が充実したものには、医療関係者ではなく裕福な注文主のために制作されたと考えられているものが少なくない[37]。さらに付け加えるならば、『健康の庭』は医者にとっての公用語であったラテン語ではなく、ドイツ語で書かれているのである。これはすなわち、医学を修めておらず、ラテン語にも不慣れな読者層をも想定していたということを意味する。ちなみに本書の扉絵には所有者の紋章を描き込むための無地の盾が描かれているが（図1）、これは、裕福な顧客層を狙って制作された装飾写本の欄外装飾に、購入者が自身の紋章を入れられるよう無地の盾や空欄をあらかじめ入れておくのと同じ意図があると言える[38]。

ここで再び『健康の庭』の序文に立ち戻ってみたい。そこには、腕の立つ画家を連れてエルサレムやシナイ山への巡礼に赴き、それぞれの地で植物を観察、記録させたと述べられている。これは実に、巡礼への興味や異国趣味を掻き立てる絶妙の文句と読むことはできないだろうか。異国のものも含め多くの薬草が挿絵入りで収録され、そのうち一部は優れた画家によって仕上げられている『健康の庭』は、医療関係者のみならず、ある程度富裕で知的好奇心を持った人々――例えばブライデンバッハ自身のような人物――が、ページを繰り、挿絵を楽しみながら様々な薬草についての知識を深める、教養本としての機能もあったに違いない。

図版出典補足

『健康の庭』：特記がないものは全てミュンヘン、バイエルン州立図書館所蔵本（註2参照）。

図4、7：*De Simplici medicina: Kräuterbuch.*（同写本のファクシミリ版。註18参照）。

図10：Baumann und Baumann, *Die Mainzer Kräuterbuch-Inkunabeln*, Farbtafel 4c.

図21：Dryades Project, Department of Life Sciences, University of Trieste, “Lavandula stoechas L. subsp. Stoechas,” image by Andrea Moro (License CC SA-BY).

図24：岡田稔、三橋博編『新訂原色牧野和漢薬草大圖鑑』より「ナルドスタキス・ヤタマンシイ」（註30参照）。

［附記］

本稿は、二〇一四年度鹿島美術財団「美術に関する調査研究の助成」による研究成果の一部を修正・発展させ、平成二十七年度科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金（若手研究B・課題番号15K16647）を受けて行った研究成果の一部です。

註

＊ ISTC: The British Library, *Incunabula Short Title Catalogue* 書誌番号。
<http://www.bl.uk/catalogues/istc/index.html>.

1　グーテンベルク聖書やその関連文献については以下に詳しい。安形麻理『デジタル書物学事始め：グーテンベルク聖書とその周辺』勉誠出版、二〇一〇年。

2　ISTC: ig00097000. バイエルン州立図書館所蔵本（2 Inc. c.a. 1601）のデジタルファクシミリが以下で公開されている。[BSB-Ink W-93–GW M09766], *Münchener Digitalisierungs Zentrum: Digitale Bibliothek*, Bayerische Staatsbibliothek, http://daten.digitale-sammlungen.de/bsb00032739/image_1（二〇一六年一月三日閲覧）。

3　活版印刷本初の挿絵入り本草とされるのは、ローマの Johannes Philippus de Lignamine 印行 *Herbarium Apuleii Platonici*（一四八一年頃; ISTC: ih00058000）で、一三二枚の木版挿絵が入れられている。続いて出版されたのは、一四八四年、ペーター・シェーファー印行の『マインツ本草』（『ラテン語本草』; *Herbarius Maguntie* もしくは *Herbarius latinus*; ISTC: ih00062000）で、一五〇枚の木版挿絵を含む。

4　例えば、Trew, Christoph Jakob. *Librorvm botanicorvm catalogi duo qvorvm prior recentiores qvosdam posterior plerosque antiqvos*... Nürnberg, 1752, 11; Schuster, Julius. „Secreta salernitana und Gart der Gesundheit: Eine Studie zur Geschichte der Naturwissenschaften und Medizin des Mittelalters“. *Mittelalterliche Handschriften: Paläographische, kunsthistorische, literarische und bibliotheksgeschichtliche Untersuchungen. Festgabe zum 60. Geburtstage von Hermann Degering*. Hg. von Alois Bömer und Joachim Kirchner. Hildesheim: Georg Olms, 1926, 219–20; Nissen, Claus. *Die botanische Buchillustration: Ihre Geschichte und Bibliographie*. Zweite Auflage. Stuttgart: Hiersemann, 1966, 28–30.

5　White, Eric Marshall. *Peter Schoeffer: Printer of Mainz. A Quincentenary Exhibition at Bridwell Library. 8 September–8 December 2003*. Dallas: Bridwell Library, 2003, 66–67.

6　シェーファーが出版者として本のデザインに関与した例については、以下を参照のこと。Ikeda, Mayumi. “The First Experiments in Book Decoration at the Fust-Schöffer Press.” *Early Printed Books as Material Objects: Proceedings of the Conference Organized by the IFLA Rare Books and Manuscripts Section, Munich, 19–21 August 2009*. Ed. Bettina Wagner and Marcia Reed. Berlin; New York: De Gruyter Saur, 2010, 39–49. IFLA Publications 149.

7　フランクフルト大学図書館所蔵Inc. fol.131. 本書は出版後間もない時期に製本され、その後再製本された形跡がないため、オリジナルの大きさを保っている可能性が高い。

8　『健康の庭』の構成については以下を参照のこと。Fuchs, Reimar Walter. „Die Mainzer Frühdrucke mit Buchholzschnitten 1480-1500“. *Archiv für Geschichte des Buchwesens* 2 (1960): 81–83.

9　註3を参照のこと。

10　序文は以下にその全文が出版されている。Choulant,

Ashgate, 2006, 118; Collins, Minta. “Introduction.” *A Medieval Herbal: A Facsimile of British Library Egerton 747*. London: The British Library, 2003, 9.

15 Collins, Minta. *Medieval Herbals: The Illustrative Traditions*. London: The British Library, 2000, 239–98; *A Medieval Herbal: A Facsimile of British Library Egerton 747*. London: The British Library, 2003（本写本のファクシミリ本）。本写本については、大英図書館のウェブサイトで全ページのデジタル画像が閲覧できる。“Detailed Record for Egerton 747.” *Catalogue of Illuminated Manuscripts*. The British Library, http://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=8319（二〇一六年一月二日閲覧）。

16 Collins, “Introduction,” esp. 2, 13–16. ロンドン写本の挿絵の写実性について初めて注目したのは、オットー・ペヒトの一九五〇年の論考である。Pächt, Otto. “Early Italian Nature Studies and the Early Calendar Landscape.” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 13.1 (1950): 13–47, esp. 27–30.

17 Collins, *Medieval Herbals*, 265, 278–83.

18 比較対象として用いたのは、主としてロンドン写本とバーゼル大学図書館所蔵『単味薬について』（KⅡ11; 中東部ドイツ、一四五〇年頃; 以下「バーゼル写本」）である。後者については、以下のファクシミリ版を使用した。*De Simplici medicina: Kräuterbuch—Handschrift aus dem letzten Viertel des 14. Jahrhunderts im Besitz der Basler Universitätsbibliothek*. Basel: Sandoz, 1961. 加えて、ベルリン州立図書館所蔵の医

Ludwig. *Graphische Inkunabeln für Naturgeschichte und Medizin*. 2. Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1858. Hildesheim; Zürich: Georg Olms, 2000, 21–24.

11 Fuchs, „Die Mainzer Frühdrucke“, 85–87. これ以降の研究でも基本的にはFuchs論が受け入れられている。ブライデンバッハの生涯については、同書35–36; Ross, Elizabeth. *Picturing Experience in the Early Printed Book: Breydenbach's* Peregrinatio *from Venice to Jerusalem*. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 2014, 6–12を参照のこと。

12 ブライデンバッハの巡礼の記録と旅程については、Uhlhorn, Friedrich. „Zur Geschichte der Breidenbachschen Pilgerfahrt“. *Gutenberg-Jahrbuch* 9 (1934): 107–11; Fuchs, „Die Mainzer Frühdrucke“, 37–40を参照のこと。『聖地巡礼』(ISTC: ib01189000)は、一四八六年二月十一日付でラテン語の初版がペーター・シェーファーの印刷所から出版されている。本書の序文に、「画家エルハルト・ロイヴィッヒを巡礼に同行させた」との記述がある。

13 『健康の庭』における『単味薬について』の挿絵の影響は、一九二六年のユリウス・シュスターの論考で初めて明らかになった。シュスターは、『健康の庭』の挿絵中四分の一程度が中世の本草写本を手本に描かれたものだとしている。Schuster, „Secreta salernitana“.

14 Givens, Jean A. “Reading and Writing the Illustrated *Tractatus de Herbis,* 1280-1526.” *Visualizing Medieval Medicine and Natural History, 1200–1550*. Ed. Jean A. Givens, Karen Reeds, and Alain Touwaide. Aldershot:

学系写本（Cod. Ham. 407; フランス、一四〇〇年頃；以下「ベルリン写本」）も参照した。

19 ピーター・ジョーンズは、蛇や虫などの咬み傷や刺し傷に効く薬草の挿絵に蛇が描かれることがあると指摘している。Jones, Peter Murray. *Medieval Medicine in Illuminated Manuscripts*. London: The British Library, 1998, 61.

20 Müller-Jahncke, Wolf-Dieter. „Deshalben ich solichs an gefangen werck vnfolkomen ließ: Das Herbar des ‚Codex Berleburg' als eine Vorlage des ‚Gart der Gesundheit'". *Deutsche Apotheker Zeitung* 117.41 (1977): 1663–71. 当該写本は、元はバート・ベルレブルクのザイン・ヴィトゲンシュタイン城附属図書館所蔵（Bad Berleburg, Sayn-Wittgensteinsche Schloßbibl, Ms. RT 2/6）であったが、現在は所蔵先不明である。本写本については、以下の研究書を参照のこと。Dressendörfer, Werner, Gundolf Keil, und Wolf-Dieter Müller-Jahncke. *Älterer deutscher „Macer"* — *Ortolf von Baierland „Arzneibuch"* — *„Herbar" des Bernhard von Breidenbach* — *Färber- und Maler-Rezepte*. Müchen: Edition Helga Lengenfelder, 1991. Codices illuminati medii aevi 13.

21 Dressendörfer, et al., *Älterer deutscher „Macer"*, 35–37.

22 この書き込みの詳細については、Müller-Jahncke, „Deshalben", 1666を参照のこと。

23 Baumann, Brigitte, und Helmut Baumann. *Die Mainzer Kräuterbuch-Inkunabeln „Herbarius Moguntinus" (1484), „Gart der Gesundheit" (1485), „Hortus sanitatis" (1491): Wissenschaftshistorische Untersuchung der drei Prototypen botanisch-medizinischer Literatur des Spätmittelalters …* Stuttgart: Hiersemann, 2010, 122.

24 ベルレブルク写本の存在を知らなかったシュスターは、本写本を手本として描かれた挿絵数点について、「押し花にされたように見えるが形態的には正しく描写できている」と述べている。Schuster, „Secreta salernitana", 219.

25 「銅版トランプ」研究の代表的なものとしては以下を参照のこと。Buren, Anne H. van, and Sheila Edmunds. "Playing Cards and Manuscripts: Some Widely Disseminated Fifteenth-Century Model Sheets." *The Art Bulletin* 56.1 (1974): 12–30; Wolff, Martha. "Some Manuscript Sources for the Playing-Card Master's Number Cards." *The Art Bulletin* 64.4 (1982): 587–600. 銅版トランプの最大のコレクションを有するフランス国立図書館では、同館所蔵の銅版トランプのデジタル画像が閲覧できる。[Jeu de cartes numérales], *Gallica*, Bibliothèque nationale de France, http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b7200358m（二〇一六年一月三日閲覧）。

26 銅版トランプ《鹿の二》の牡鹿だけをコピーして新たに彫り直した銅版画も残っているが、『健康の庭』ではそのようなものを参考にした可能性もある。例えばウィーン、アルベルティーナ版画素描館所蔵《獣の一》DG1926/617を参照のこと。http://sammlungenonline.albertina.at/?query=Inventarnummer=[DG1926/617]&showtype=record（二〇一六年一月三日閲覧）。

27 ブリジット・バウマンとヘルムート・バウマンは、『健康の庭』の薬草や薬物の挿絵三七九枚のうち七七枚は既存の手本によらずに描かれたとしている。Baumann und Baumann, *Die*

Mainzer Kräuterbuch-Inkunabeln, 127–30. ただし筆者はバウマンの意見に全面的に同意する訳ではない。

28　前者の見解は Schuster, „Secreta salernitana“, 219–20. 後者は Baumann und Baumann, *Die Mainzer Kräuterbuch-Inkunabeln,* 138–40.

29　この種については以下を参照のこと。Upson, Tim. “The Taxonomy of the Genus *Lavandula L.*” *Lavender: The Genus* Lavandula. Ed. Maria Lis-Balchin. London: Taylor & Francis, 2002, 16–19.

30　甘松については以下を参照のこと。岡田稔、三橋博編『新訂原色牧野和漢薬草大圖鑑』北隆館、二〇〇二年、「九六三ナルドスタキス・ヤタマンシイ」、五〇八頁。

31　Vitry, Jacques de. *Histoire des croisades [Historia Hierosolymitana abbreviata (français)].* Éd. par François Guizot. XXII. Paris: Brière, 1825. Collection des Mémoires relatifs à l’histoire de France, 175–77. 以下の文献によると、本書中の *pomme d’orange* がダイダイと同定しうる。Calabrese, Francesco. “Origin and History.” *Citrus: The Genus* Citrus. Ed. Giovanni Dugo and Angelo Di Giacomo. London: Taylor & Francis, 2002, 8.

32　調査対象は以下のコピーである。パリ、フランス国立図書館所蔵 RES-TE142-18, フランクフルト大学図書館所蔵 Inc. fol.131と4° R 826.7290, ベルリン州立図書館所蔵 Inc. 1542, マインツ、グーテンベルク博物館所蔵 GM Ink 126, ミュンヘン、バイエルン州立図書館所蔵 2 Inc.c.a. 1601（デジタルファクシミリ使用）、ロンドン、大英図書館所蔵 IB.242.

33　池田真弓「ペーター・シェーファー出版『ラテン語本草』と『健康の庭』――十五世紀印刷本草の挿絵分析――」『鹿島美術研究』第三三号別冊、二〇一五年、七七―七八頁。『マインツ本草』については註3を参照のこと。

34　Keil, Gundolf. „Die Texte des ‚Kodex Berleburg‘ im Spiegel Altdeutscher Fachprosa“. In *Älterer deutscher „Macer“*, 36.

35　Collins, “Introduction,” 5–6.

36　Collins, “Introduction,” 5–6, 18.

37　例えば有名な『カラーラ植物誌』（*Carrara Herbal*; ロンドン、大英図書館所蔵 MS. Egerton 2020）は、一四〇〇年頃、パドヴァ公フランチェスコ・カラーラ二世のためにパドヴァの修道士ヤコポ・フィリッポが制作した。Jones, *Medieval Medicine*, 68. また、フランスで十五世紀前半に制作された『単味薬について』（*Livre des simples médcines*; コペンハーゲン、デンマーク王立図書館所蔵 GKS 227 2°）は、裕福な注文主のために制作されたであろうと推測されている。Givens, “Reading and Writing ,” 125–35, esp. 132–34.

38　例えば大英図書館所蔵 MS. Harley 2757, fol.1rを参照のこと。“Detailed record for Harley 2757.” *Catalogue of Illuminated Manuscripts*. The British Library, http://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=3904&CollID=8&NStart=2757（二〇一六年一月四日閲覧）。